

平成 29 年度 第 2 回歯科口腔保健推進懇話会 (議事要旨)

日時：平成 29 年 12 月 26 日 (火) 14 時～16 時

場所：神戸市役所 1 号館 14 階大会議室

司会：中山 保健課長

1、開会

2、あいさつ (三木局長)

3、報告

(1) 神戸市歯科口腔保健推進懇話会 (平成 29 年 8 月 23 日) 議事要旨について (資料 3)

(2) 神戸市歯科口腔保健推進検討会 (平成 29 年 10 月 11 日) (平成 29 年 12 月 8 日) 議事要旨について (資料 4、資料 4-2)

(3) 口腔がん検診について (資料 5)

委員—口腔咽頭がんが先進国で唯一増えている日本の状況に鑑み、早期発見し早期治療に結びつけるため、口腔がん検診を立ち上げた。11 月初旬から受付を開始したが、申し込み多数のため検診日を増加する。

12 月 7 日に 1 回目の口腔がん検診を実施した。検診数は 11 人、1 人当たりの検診所要時間は 5～10 分程度ですべて異常なし。検診方法は、視診、触診、ベルスコープ (蛍光検査) で、当日の状況について、担当歯科医師から報告してもらう。

委員—当日は 11 人が受診。全員 40 歳代以上で、夫婦、親子等、ペアの方もあった。問診票に記入後、それに基づいて、視診、触診、ベルスコープによる検診を実施。ベルスコープは、光をあてると腫瘍性病変の異常部位は暗く沈んでみえる。問診内容によって検診時間は 1 人 5～10 分で、30 分で 2 人の予定であったが、今後はもう少し増やせると思うので、歯科医師会と検討していく。

(4) 訪問口腔ケアについて (資料 6)

委員—要介護高齢者へは訪問歯科治療で対応しているが、口腔ケアや口腔機能管理について、歯科衛生士会との協働で実施。医師会、薬剤師会へのポスター掲示依頼とともに、医療・介護サポートセンターのコーディネイト研修会 (11 月 17 日) で歯科衛生士会より事業説明等実施。実施件数は 4～11 月までで 106 件となっており、実施件数が増えてこないのが事業の周知が課題と考えている。1 月に歯科医師、歯科衛生士向けの研修会を予定している。

4 議 題

(1) 「こうべ歯と口の健康づくりプラン (第 2 次)」(案) について (資料 7) 事務局より説明
会長—古来より「口は健康の入口」と言われてきたが、近年、口の健康と全身の健康がつながるというエビデンスが色々出てきた。最近、内閣府が「食べることは生きること」や「骨太の方針」に「口腔保健のさらなる推進」等歯科にとって非常に追い風となっている。

委員—「科学的根拠に基づく施策」「健康格差の縮小」が並ぶと、歯科では「フッ化物の応用」

となる。一番自信をもってエビデンスとして掲げているのは「フッ化物応用」なので、内容が物足りないと感じる。ライフステージ別のところには、調査するとあるが、「青少年期」以降にフッ化物のことがないのは、科学的根拠に基づく施策というにはとても寂しい。乳幼児期だけに「フッ化物応用」があるが、本丸は「学童期」である。学童期にしないのは、一番重要な年代が抜けている。青少年期以降、若者期、壮年期、高齢期まで生涯を通じて「フッ化物応用の推進」等というような文言を入れてほしい。障害者について、治療や健診にシフトしており、予防が少し欠落しているように思う。障害者は、う蝕、歯周病とも超ハイリスク者なので、予防対策としてブラッシング、フッ化物応用を考えてほしい。

高齢者に口腔機能が入ったのは評価できるが、高齢期だけでなく乳幼児期、学童期のところの口腔機能が大切になってくるので、取り組んでほしい。

委員—フッ化物応用については同意見。

歯肉に異常がある割合が、小学6年から中学1年のところで、倍に増加している。課題にもなっており、親が面倒を見なくなるというようなことが考えられるが、背景や原因が分かれば課題は解決に向かうと思う。

「むし歯を持つ人の割合」と「フッ化物洗口の実施施設割合」図の施設分類が違うので整合性をとることが必要。

公立保育所の3歳あたりから、むし歯を持つ児の割合が民間や市立幼稚園と比べて高いように思う。フッ化物洗口は公立保育所では100%の施設で実施しているとのこと、逆の傾向が出ているのが不思議である。

障害児のところで、治療が困難な子と言うのは、暴れたりする子と言う意味だと思うが、発達障害児の中には、感覚が過敏や鈍感であったりして、その影響で敏感に痛がったりする場合がある。

検討会で「放課後デイ」の話が出ていたが、基本的に小学校以上は学童保育のようなもの、小学校未満は地域の障害児療育センターのようなものことで、アプローチするならそういうところとの連携も可能と思う。

会長—公立保育所のむし歯が多いのは不思議。何か理由はあるのか。

事務局—地域差があると思う。9区内、際立ってむし歯率の高い区がある。フッ化物洗口は、4、5歳での実施なので、公立保育所では3歳ですでにむし歯になっている子が多い。

委員—フッ化物の応用、実施ということでは、重要な時期が飛んでいるのではないか。この時期というのは学校の教育現場である。教育委員会は、人的な問題等で難しいとのことであるが、「学校でのフッ化物洗口を実施する」「学校でのフッ化物洗口に向けて調査・研究、または試行する」等に文言を変えれば実施に向けて進むのではないかと思う。義務教育というのはその年代を100%把握できるので、教育の場で進めていくのが効率的である。ここでフッ化物という知識を与えることで、先々まで効果のあるものになっていく。

会長—フッ素は、歯科で本当に信用できるツールなので、活用してほしいとのことである。

委員—歯科健診率のアップについて、いかにあげていくかということ、行政、歯科医師会、歯科衛生士会等歯科関係者が一緒になってやっていく努力が必要。

この冊子には大切なことがたくさん載っているので、関係者、市民にどのように広報し、生かしていくのか。

中・高生の歯肉炎の増加について、小学校の間は親の監視下にあるが、中・高生になれば、自分で自分の身体を守っていく時期であるという意識を持たせないといけない。しかし、現状の学校教育の中に歯科保健教育が取り入れられていないため、高校生になっても歯周病と全身疾患との関係を知らない生徒が多い。このあたりへのアプローチをしなくては、歯肉炎の減少に繋がらないと思う。

委員—歯肉の異常が小学校から中学校に進むにつれ増加していき、高校になるとさらに大きく増加しているので、関係者が協力して何とか押さえ込むような手段を考えてもらいたい。

冊子は、市民の方に手にとってもらえるよう、カラフルにしてはどうか。

ライフステージの「若者期」が40歳位までというのは違和感がある。「若年期」としてはどうか。その他については、余り修正の必要がなく、課題解決していく実行のみと思う。

委員—子どものむし歯のデータを見ると、健康状態というより物をかむ力がない子が多いので、歯科医師が栄養士を活用することもいいのではと感じた。

健康に関して、関係者が連携して市民に寄り添うことが大切であるから、色々な情報を入れてもらえれば協力できる。

フレイルチェックを薬局で行うようになって感じたが、医師・歯科医師は治療を中心に考えるが、薬剤師会は予防の観点で、変化を見つけるところからスタートしている。そのため、必ずしも医療に結びつけるものではなく、心の問題や生活支援等で治していくことも考えている。関係機関の連携と協力の体制が大切。

委員—会社で健康診断はあったが、歯科はなかった。勤めていると定期的に歯科受診は難しく、チャンスは職場健診だがなぜないのか。会社の意識として後回しになっているように思う。兵庫県の健康チャレンジ企業に登録すると、サポートの案内等が来るので、その中で歯科の取り組みを会社の行事としてもらえれば、機会ができると思う。

私はNPO的活動を行っているが、一人で食事をする方の中には、なかなか口腔ケアまで行き届かない方が多い。食べる・歯みがき等生活習慣が乱れると、引きこもりがちになるが、人と会うということで、口臭を気にして歯みがきをする等是正される部分があるため、そのような機会を作ることが大事。

また、私はマラソンをしているが、マラソンの申し込み会場で健康診断がある。そのような機会に、歯をチェックするようなものがあれば良いと思う。

委員—「8020」は50%の方が達成しているので、「オーラルフレイル」を並列で広めていこうとしている。各論だけでなく、計画の基本の目標の、「8020を達成し、口の機能を維持することにより」に「オーラルフレイル」も入れてほしい。

乳幼児はむし歯が二極化しているが、就学時健診時に既にほとんどの歯がむし歯の子が特に兵庫区で多い。保護者の問題と思うが、「乳幼児期(0~5歳)」に保護者への指導、啓発等入れられないか。

「若者期」は歯科健診が義務化されていないので、大学生、職場での歯科健診がない。

チャレンジ企業等を使ってもらえたらよいと思うが、関係機関の取り組みで、「歯科健診の導入を検討する」を「取り組む」にしてほしい。また、行政の取り組みも「職域保健と連携して歯科口腔保健について情報発信する」を「歯科健診の導入を推奨する」か「推進する」にしてもらいたい。

委員―歯科の救急医療対策で、神戸市歯科医師会、市民病院群、神戸大学病院群でチームを組んで休日診療を運営している。課題で「2次医療機関との連携」となっているが、重症歯性感染症等の場合、非常に重症の状態での紹介となっているので、高次医療機関への紹介のタイミングが大事と思う。紹介のタイミングが難しいと聞くことがあるので、顔の見える地域連携等が、関係機関の取り組みの中にあればよいと思う。

がん対策として大事なのは関係機関の取り組みで、口の中を見る医療機関としては歯科医院が圧倒的に多いので、歯科医院の役割は大きいと思う。顎骨壊死と紹介されたのが、「がん」であったケースがあったので、関係機関の取り組みに「医科歯科連携の必要性」、や歯科医師会会員向けの研修会の推進等が必要と思う。

「薬の副作用」のところ、骨粗鬆症の薬の副作用で顎骨壊死が起こるとなっているが、今は自然発生と変わりなく、むしろ、乳がん・前立腺がんの抗がん剤の分子標的薬の副作用で起こることの方が多いので、抗がん剤も入れたほうがよいと思う。

委員―フッ化物洗口は教育委員会に何度もお願いしてこうなったが、もう少し進めてほしい。事業所健診は、区歯科医師会から企業へのアプローチをしているが、医科の健診は補助が出るが、歯科はないので全然進展しない。歯科健診は非常に重要なので、今後も積極的に続けていきたい。

以前「医療連携」になっていたところが「がん対策」と「周術期」になった。新規事業ということでこうなったかと思うが、今後5年間の計画としてはどうか。「医科歯科連携」はよく言われているが、薬の副作用については薬剤師会との連携等、今後色々な形での連携が必要になると思うので、「医療連携」にしてほしい。

「がん対策」の執務歯科医師が中央市民病院となっているが、希望者が増えてくると対応が難しくなるかもしれないので、病院名の後に等を入れてほしい。

委員―フッ化物の応用については、出ているご意見と同じことを強く感じており、もう少しエビデンスを導入してほしい。実際にはクリアしないといけないことは多々あると思うが、姿勢としての方向は大切ではないか。

歯肉に異常のある割合が、中1、高1で増加していることについては、年齢とともに増えるのは当然であるが、別の調査で、歯科健診後に歯科医院受診が必要にも関わらず未受診の割合が、小学生では50%以下だが、中学生で60%に増え、高校生になると84%となり、80%を超える割合で受診していないとの結果が出ている。受診勧奨があったにも関わらず受診していないと言うことは、定期健診も未受診と思われるので、歯科疾患に関する知識を身につける機会がないと思われる。

なおかつ、中学生は乳歯から永久歯に生えかわる時期で、むし歯は一時的に減少するため、学校健診でむし歯が減少したと認識すると、さらに未受診傾向が高まり、歯周病が増えるのではないかとと思われる。もちろん健康格差もあるのかもしれないが、どこかで対策をとらないといけない。要はかかりつけ歯科医を持つことは、成人だけで

なく小さいときからとなる。

乳幼児期から小児期にかけての口腔の機能が、高齢期のフレイル、オーラルフレイルまで影響を及ぼすとしたら、ライフステージすべてで、口の健康を守る必要があることを、市民にどのように強く啓発していくか。この冊子はその役目としての確であると思う。

委員―「若者期」がライフステージに盛り込まれたのは画期的と思うが、「壮年期」との違いが明確でない。兵庫県のアンケート調査では、この年代の者は、むし歯より見た目重視で、口臭等エチケット的な心理面を気にしているため、そのあたりを盛り込んでどうか。この時期は暗黒期と言われ対策は難しい。次年度、県立大学生の歯科健診を内科健診と併せて行う。歯科単独より内科と併設が自然な流れかと思う。

小・中学校のむし歯の地域差がきれいに出ているので、むし歯の多いところから集団的ケアとしてフッ素介入をモデル的に考えてはどうか。併せて「歯は一生もの」という正しい知識を、家庭だけでなく学校単位で行うと今後の活動につながる。

委員―「教育」が前面にでていない。子どもの頃から教育していくと、親になった時に次世代に生きる。

年齢刻みの「若者期」が18～39歳と、65歳以上が「高齢期」が気になる。日本老年医学会は、75歳以上と提言しているため、フレイルも65歳で行うのが良いのかは疑問である。

学童期の歯科教育は非常に大事と思う。口腔だけでなく、全身疾患と関連があることを明確にしていかないと、教育の効果はあがらない。また、学校教育だけでなく、産業界も含めて行わないと、医療費等に関連してくる。

会長―社会保障費を減らすのは、口の健康が大きく貢献すると思う。

(2) 歯科口腔保健推進関連会議スケジュールについて(資料8)

事務局―本日の意見を集約して、1月中旬から1ヶ月間パブリックコメントを実施予定。その後3月に「神戸市歯科口腔保健推進検討会」「神戸市歯科口腔保健推進懇話会」を開催し、パブリックコメントの意見を反映した最終案を提示し、プラン策定とする。

(3) その他、情報交換等について

事務局―「くちビルディング選手権」(資料9)について説明

10月1日(日)に「こうべ福祉・健康フェア」を開催した中で実施した。

閉会あいさつ(伊地智所長)